

奥胎内ダムはなぜ水を溜める必要があるか

石 沢 進

奥胎内ダムの目的は、100年に一回に起こるであろう洪水を防止するためであるという。めったに起こらない洪水対策としてのダムであるならば、その構造には機能を優先させるべきと考えている。つまり、普段は水を溜めることはしないで、洪水時に流下する水を溜める機能を優先させるのが、最良の方法と思われる。なぜ普段水を溜めておく必要があるのか、その必要性が理解できない。

奥胎内ダムに水を溜めることがこの河川の生態系に大きな影響があることを多くの方々に理解を頂いて、湛水しないダムの建設をお願いしたい。奥胎内川の最大の特徴は、低海拔の河川沿いであるにもかかわらず多くの亜高山性の植物が生育する、という植物分布の観点にある。飯豊山系でも最も低い海拔にまで亜高山性の植物が分布している河川である。したがって、ここに湛水することは、この地域の特徴ある生態系を破壊することにつながることを認識して頂きたい。胎内川には下流部に既設ダムがいくつもあるので、その改善策が先決であり、奥胎内ダム自体の建設に賛成ではないが、すでに着工しているので、ダム建設即時白紙撤回は難しいと思う。しかし、ダムの形態を目的にかなったものに変更することは可能であろう。ダムに湛水しない、底抜けダム、つまり普段は普通の河川のように水が流下し、極端な洪水時に水が数日間停滞するダムであれば、河川の生態系を完全に破壊することはないと考える。国立公園内でのダムであることから、生態系を破壊するような工法は避けるべきであると思うし、湛水するダムの寿命も極めて短いともいわれており、短期間の洪水対策のために長い歴史をもつ奥胎内の特色ある河川の生態系を失うことは、極めて残念であり、生態系の保存が望まれている現在に逆行する行為であると断定せざるをえない。

この地域の保存の必要性は本誌12号や県からの意見聴取の際にも、指摘してきているが、関係当局の理解が得られず着工に至ってしまった。改めて本誌に取り上げたのは、再度関係当局にこのダムの在り方を考えて頂きたいし、また多くの方々に生態系の破壊につながるこのダム建設の反対について理解を得たいと思っている。参考までに本誌12号掲載のダムの建設に伴って消失する亜高山性の植物について次頁に再集録する。

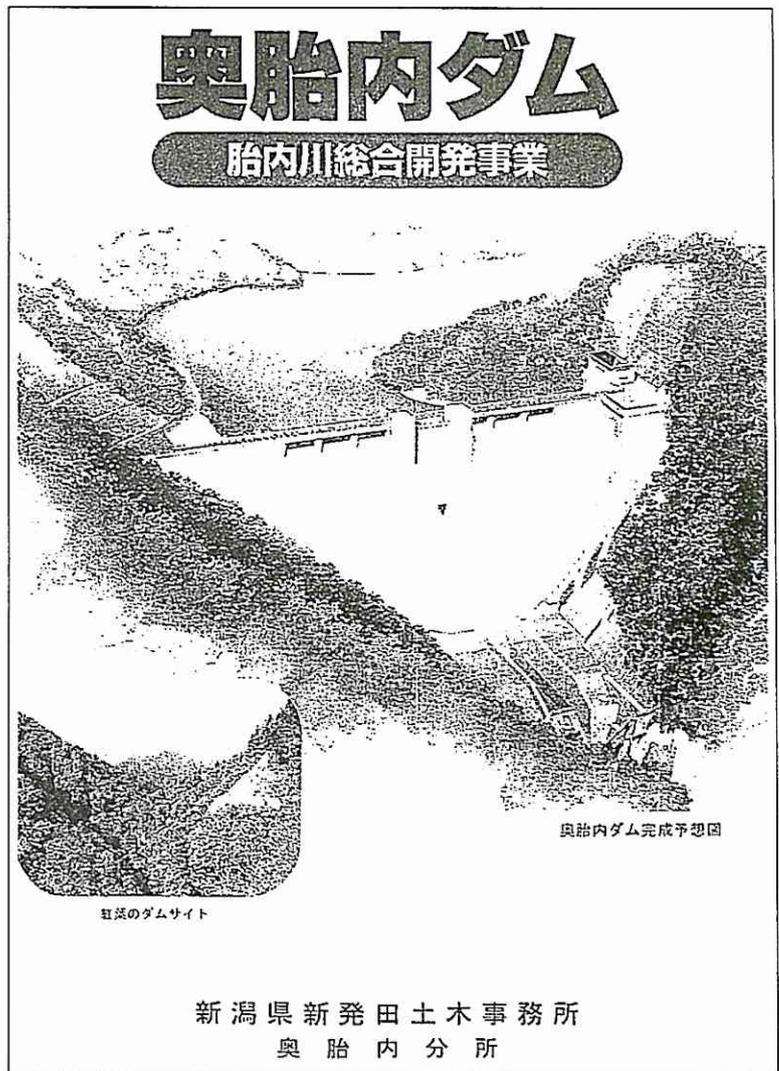


図 完成時水没する溪谷 兩岸の生態系は完全に破壊

**奥胎内ダムは湛水しない底抜けダムにして
河川沿いの生態系保全を優先すべきである**

3) 高山・亜高山帯の植物の低海拔分布

飯豊連峰の河川沿いには、高山植物の低海拔分布が、顕著に認められる。県内でも飯豊連峰で最低海拔に分布する植物には次のものがある。特に、山体の北西側で低海拔まで分布している。オンタデ、フキユキノシタ、オオカサモチ、ミヤマホツツジ、オオバノミゾホオズキ、タカネコウボウ、コバイケイソウなどその例である。

その生育地の殆どが「森林生態系保護予定地域」外の胎内川流域にあるので、保護地域に含めるように再考を願った。しかし、ダム建設予定地なので、保護地域に含めることができないとの意向にまとなり、結果的には全て「森林生態系保

護地域」外になり、この生育地はダムの建設でやがて絶滅してしまうであろう。

飯豊連峰の中で、特に奥胎内：胎内川流域における低海拔分布の植物が多いが、次にその主なものを表示する。

胎内川流域における低海拔分布の植物

羊歯植物：オオメシダ (345m) *、シラネワラビ(327m)、ミヤマワラビ(380m)、シノブカグマ(354m) *、カラクサイノデ(400m)、ミヤマシシガシラ(300m)

被子植物 双子葉植物：オンタデ(327m)*、イタドリ(430m)*、カラマツソウ(327m)、モミジカラマツ(326m)、フキユキノシタ(378m)*、ズダヤクシュ(329m)*、ノウゴウイチゴ(327m)、オオバセンキュウ(332m)*、オオカサモチ(405m)*、イブキゼリ(378m)、ミヤマホツツジ(345m)*、オオバノヨツバムグラ(330m)*、ミヤマクルマバナ(327m)、タテヤマウツボグサ(345m)、オオバミゾホオズキ(411m)*

単子葉植物：キンコウカ(372m)、コバイケイソウ(345m)、タカネコウボウ(378m)*、カニツリノガリヤス(390m)*、ヒゲノガリヤス(335m)、ミヤマドジョウツナギ(326m)、ザゼンソウ(345m)

()内は最低海拔 * 印は新潟県植物分布図集に掲載

上記のうちオンタデ、フキユキノシタ、オオカサモチ、ミヤマホツツジ、オオバミゾホオズキ、タカネコウボウなどは新潟県でも最低海拔の分布地点であって注目すべき植物である。

これらの植物の低海拔での生育地は、森林の林床にはなく、ほとんどが日のよくあたる河川沿いの岸壁や斜面に限っている。飯豊連峰の奥胎内の河川流域は深いV字溪谷になっており、低海拔分布の植物は、その溪谷の斜面に限って生育している。

このように胎内溪谷において低海拔に生育していることは、それぞれの種の生態分布を知る上で興味深く、貴重な存在と思われる。飯豊連峰の山腹部は一般に急峻な地形であ

り、高所から低所への種子や株の供給があること、溪谷の奥深い地域に人為的な影響があまり及ばなかったことなどに加えて、飯豊連峰の北西部にあたり、冬期の降雪の多いところであって、その多雪環境もこれらの種の温存を可能にしているものと考えられる。ちなみに 8月下旬ですら溪谷に残雪を見る年もある。そして、その付近は、高山の環境と類似して高山性の植物が生育している。このような観点から飯豊連峰でも特異な地域であり、飯豊山をとりまく山麓の植物分布上のきわだった特徴であり、将来とも保存しておきたいものである。

石沢 進 (1992) 飯豊連峰の森林生態系保護地域
植物保護 12号：10 - 15. から引用



オンタデ 本流 380m
1986. 8. 26



フキユキノシタ 本流 335m
1990. 8. 25



タテヤマウツボグサ 本流 305m
1986. 8. 26